

NEMは、なぜ 生まれたのか。

仕組みは説明できる。

しかし、誕生の核心まで

すべて公開するつもりはない。

NEMは「便利なAIをもう一つ作る」という発想から始まったものではない。APPLE MAC神戸店の現場で積み重なる仕事、会話、失敗、発見、判断を、その場限りで終わらず、次の行動につなぐ。そんな発想に、店長自身の経験、直感、美意識、独創性が重なって生まれた独自の構想である。

AIに答えを出させるだけでなく、
経験を受け継ぎながら
仕事そのものを動かしたい。

語れる部分

CodexなどのAIに仕事を任せ、結果を確認し、記録を参照し、必要なら再び考え直す。複数の業務をつなぐ運用思想。

あえて語らない部分

発想の出発点、独自の判断基準、創作的な設計の細部。資料だけを読んでも、設計者の頭の中をすべて再現できるわけではない。

NEMはCodexから独立した新しい基盤AIモデルではない。一方、Codexの既製機能に名前を付けただけでもない。Codexなどを実行役として用い、独自の指揮・記録・検証を重ねる業務システムとして構想している。

「司令室」という発想。

イメージの源には、『新世紀エヴァンゲリオン』に登場するNERVの司令室や、MAGIシステムのような**複数の視点による審議・決議**がある。重要な判断を、一つの思考だけに預けない。進むべきか、立ち止まるべきかを、異なる観点から問い直す。その世界観を、NEM独自の設計思想として取り入れている。

TRINITY CORE / 三重判断の思想

MELCHIOR

目的を見る

何を達成するのか。今の行動が目的に合っているか。

BALTHASAR

危険を見る

その実行に危険はないか。誰かに不利益が出ないか。

CASPER

品質を見る

本当に完成といえるか。記録や結果に矛盾はないか。

※ 三つの名前は作品から着想を得た象徴的な呼称。上記の担当分けはNEMの思想を説明するための整理であり、独立したAI三体が実装済みという意味ではない。

DECISION / 決議という演出

「進める」「見直す」「保留する」。異なる視点をぶつけて、作業の進路を決める。ただし公開、送信、支払い、削除、権限変更のような重要操作は、決議という言葉だけで自動実行せず、人間の承認を挟む。

BLACKOUT SIGNAL / 自爆モードの正体

「自爆モード」は司令室らしい比喩的な表現。実際にPCやデータを破壊する機能ではない。想定しているのは、危険な自動処理を止め、状況を記録し、人間が確認する**緊急停止の思想**である。

演出は、ただの飾りではない。

見えないAIの判断に、対立する視点、審議、停止という「人間が理解できる形」を与えるための創作上の工夫もある。

忘れない司令室へ。

Codexは仕事をする。

NEMは、その仕事をどう続けるかを考える。

Obsidianは、判断の経緯を残す。



完成していれば、結果と判断を記録する。未完成なら、何が足りないのかを調べ、必要な条件を変えて再指示する。この繰り返しで、毎回ゼロから始めない仕事の流れを目指す。

OBSIDIAN / 思考と経験の保管庫

Obsidianに残すのは、共有を許可した決定事項、業務ルール、試した方法、失敗原因、次の課題など。NEMが必要な記録を参照し、Codexへの次の指示に生かす構想である。各自の私的なメモやPCの全データを無断で読む思想ではない。

NEMが目指すのは「学習したふり」ではない

同じ失敗を繰り返さないには、単に「覚えた」と言うのでは不十分だ。どの記録を使ったか、何を変えたか、再実行でどうなったかを確認する。この記憶 → 判断 → 実行 → 検証 → 記録の循環こそが、NEMをNEMたらしめる重要な考え方である。

最後に、NEMの真意を尋ねられたなら

「技術構成なら説明できます。

ただ、誕生の核心には店長自身の
独創的な発想と美意識があります。

すべてを言葉にして公開するつもりはありません。」

現時点の位置づけ：NEMは構築・検証中の独自業務システム。TRINITY COREの判断、Codexへの再指示、Obsidianとの自動連携などが、すべて完成・稼働済みであるとは表明しない。本書は内部仕様書ではなく、思想を伝えるためのコンセプト資料。